くまびょう NEWS

102号

くまびょう NEWS
2005年 12月1日

[発行所]
国立病院機構熊本医療センター
（前　国立熊本病院）
〒860-0008
熊本市二の丸1番5号
TEL (096) 353-6501(代)
FAX (096) 325-2519

南カリフォルニア大学外科 ジェフリー・ヘーゲン準教授を迎えて

ジェフリー・ヘーゲン準教授

国立病院機構熊本医療センターでは、この度12月14日から20日まで米国ロサンゼルスにある南カリフォルニア大学（USC）の外科学教室のジェフリー・ヘーゲン準教授をお迎えして、院内感染に関する研究協力と研修医、レジデント教育を行ってもらうことになりました。USCというと今年1月にアメリカン・フットボールの全米チャンピオンになったようにスポーツが盛んな大学であり、日本でも良く知られているカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）のライバル校として有名ですが、医学においてもUSCとUCLAはライバル関係にあり、ともに世界的な研究成果を上げています。

USCはロサンゼルスのダウンタウンに位置し、すぐ隣にロサンゼルス・カウンティ・ホスピタル（LAC）があります。USCとLACはそれぞれ高度先進医療と救急医療を分担していますが、実は多くの医師が両病院を掛け持ちで働いています。

米国では、1996年にCDCから「病院における隔離予防策ガイドライン」が発表され、ディスポガウンやディスポ手袋、ゴーグルなどをふんだんに使う厳格な院内感染対策が行われるようになりました。ヘーゲン氏は食道外科に従事する傍ら、院内感染対策チームの一員としてUSCおよびLACで院内感染のサーベイランスや職員教育を行っています。私は厚生労働科学研究費の海外調査旅行で、本年1月にUCLA、USC、LACを訪れましたが、院内感染対策の徹底ぶりに深い感銘を受けました。今回は、ヘーゲン氏を当院に招いて、効果的な院内感染対策に関する研究協力を行うと同時に、研修医やレジデントなどを対象に講習会も行います。また、ヘーゲン氏はUSCの外科レジデント・トレーニング・プログラムの責任者であることから、「米国におけるレジデント・トレーニングの実際」という講演をお願いしています。米国の医師教育の実際を知ることができると思いますので、ご出席いただきますよう御案内申し上げます。　　（外科医長　芳賀　克夫）

臨床研修特別講演

「米国におけるレジデントトレーニングの実際
－米国最大の救急救命センターでの経験を踏まえて－」

講師：南カリフォルニア大学外科学教室ジェフリー・ヘーゲン準教授
時間：平成17年12月16日（金）19：00～20：30
場所：国立病院機構熊本医療センター地域研修センター・ホール
参加無料

ホームページをご利用下さい。診療、研修、研究など情報満載です。

国立病院機構熊本医療センター ホームページアドレス

http：//www.hosp.go.jp/~knh/

熊病を巣立って3年経ちました

医法）藤榮会
末藤内科循環器科
副理事長　末藤久和

宮﨑院長先生をはじめ、各科の先生方には、いつも大変お世話になっております。当院は内科クリニック以外に、介護老人保健施設「湧心苑」もありますので、高齢で合併症を持った複雑な症例をお願いすることが多いのですが、いつも電話一本で快く引き受けてくださり、大変感謝しております。

私は、平成8年から14年まで熊病（ってもう言わないんでしょうか？）の心臓血管センターに勤務させていただきました。赴任当初は、循環器専用の血管造影室はなく（！）心臓カテーテル検査も週5例でした。

そこで、当時の宮城医長の号令の下、症例数を増やすことになり、スタッフの充実もあって、専用のカテ室ができ、週25例と症例数も増えました。私個人としても数千例に及ぶカテーテル検査と1000例を超えるPCIをやらせていただきました。このような貴重な時期にメンバーに加えていただき、本当に感謝しております。今でも、藤本医長をはじめ心臓血管センターの先生方には公私ともに可愛いがっていただいており、今週もASOの方と狭心症の方をお願いしたばかりです。

他にも、カテーテルの製品改良や最初のクリティカルパスのプロジェクトに参加させていただいたり、毛井医長には、心臓外科の手術につかせていただいたり、高橋医長には、救急外来で開胸心臓マッサージを教えていただいたり、1分以内にIVHをとったりと、本当に貴重な経験を積ませていただきました。あ！忘年会でコーラ1.5Lの一気飲みをさせられ胃が破裂しそうになったのも貴重な経験です(笑)。

現在は、開業医として日々地域医療に明け暮れておりますが、当時の経験と、現在の熊病のバックアップがあってこそ、安心して今の診療ができているものと思います。今後とも、我々開業医の良きアドバイザーとして、また熊本の最先端医療の道標として、益々ご発展されることを期待しております。(^o^)/

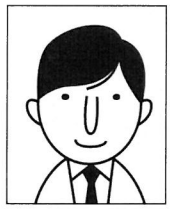
国立病院機構熊本医療センター開放型病院登録医証の発行について

登録医証は、共同指導の際に名札としてご利用頂けます。発行をご希望の先生は、管理課庶務係（TEL 096-353-6501　内線390）までお申し込み下さいますようご案内致します。

写真は時間内であれば当院内で撮影できますし、縦4cm×横3cmで顔全体が写っているものをお持ち頂いても結構です。

また、駐車場については、玄関前駐車場ゲートにて駐車券をお取り頂き、0番窓口（時間内）又は、時間外受付（時間外）にお申し出頂ければ、無料の手続きを致します。

開放型病院登録医証



○○○医師会
熊本　太郎

平成17年1月1日交付
国立病院機構熊本医療センター

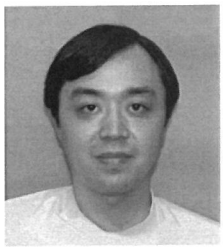
1. 国立病院機構熊本医療センターで診療を行う場合は、この証を持参し名札として着用下さい。
2. 駐車場を利用される場合は、この証を駐車場入口で提示して下さい。
3. この証の記載事項に変更があったときは速やかに届け出て下さい。
4. この証の有効期限は3年間と致します。

2005年 診療科紹介(27)

歯科・口腔外科

児玉園昭
口腔外科、一般歯科
口腔外科専門医
日本口腔外科学会指導医

蔵本和咲
口腔外科、小児歯科、
障害者歯科、一般歯科

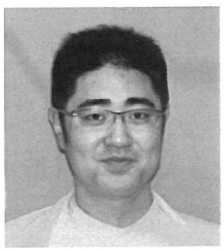


緒方誠人
口腔外科、一般歯科

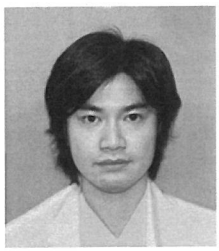
片岡奈々美
口腔外科、障害者歯科、
一般歯科

兒玉美穂
口腔外科、障害者歯科、
一般歯科

河上恭子
口腔外科、一般歯科



小林　聡
口腔外科、一般歯科



寺島貴史
口腔外科、一般歯科

中山越賀
口腔外科、一般歯科

特　色

歯科口腔外科は口腔外科領域疾患の治療を中心に救急医療、高齢者歯科医療、有病者歯科医療、一般歯科医療を行っており、平成14年度からは人間ドックに組み込まれた歯科領域の検査を行っています。さらに平成15年度からは歯科医師会からの御要望により全身麻酔が必要な重度障害者の歯科治療を始めました。

治療の中心となる口腔外科領域の症例は、歯科医院からの智歯の抜歯依頼が最も多く、その他に口腔や顎骨に発生する腫瘍、嚢胞性疾患、炎症性疾患、それに救急医療として顔面外傷、顎骨骨折などがあり、その多くは入院治療となります。

近年増加してきています高齢者の歯科医療や心疾患、高血圧症、糖尿病などの何らかの基礎疾患を持っている有病者の歯科医療は、総合病院の特性を充分に活かして内科を初めとする各科と相談しながら細心の注意を払って行っております。

病院歯科の役目としては、入院患者の歯の治療や義歯の作製を行い、食餌摂取を良好にして患者さんの体力回復を念頭において努力しております。また、入院患者さんの口腔不潔による誤嚥性肺炎などの続発症を予防するために口腔衛生指導を積極的に行っています。

（次ページへ続く）

2005年 診療科紹介(27) 歯科・口腔外科(続き)

診療実績

国立病院機構熊本医療センターは、歯科医師会の地域医療支援病院と多くの指定を受けていますが、それに伴って当科への紹介患者が年々増加し、年間500例を超しています。現在、紹介率は月平均35.2%と高率を示すようになり、紹介患者の増加に伴って、入院を必要とする口腔外科疾患も増加し、平成13年度より年間100例を超しております。

入院症例には口腔腫瘍、顎骨嚢胞、顎骨骨膜炎・骨髄炎・蜂窩織炎、顎骨骨折、歯槽骨骨折・歯牙脱臼を含めた口腔・顔面外傷、口内炎、埋伏歯抜歯、口腔出血、重度障害者の歯科治療などがあり、重度障害者は重度知的障害者、アルツハイマー型老年期認知症、統合失調症、脳性麻痺等でした。また、人間ドックの歯科領域検査は月平均12人で年間合計は140人程度です。

研究実績

当科での研究課題は、口腔腫瘍、異形成疾患の研究、口腔衛生関心度の研究、白血病・造血幹細胞移植患者の口腔ケアの研究等で、口腔外科学会・口腔衛生学会に発表しております。

ご案内

歯科口腔外科は児玉圀昭・蔵本和咲・片岡奈々美・緒方誠人・兒玉美穂・河上恭子・小林聡・寺島貴史・中山越賀の9人の歯科医師と歯科衛生士の池田貴美子のスタッフで診療を行っております。

診療は外来が月曜日から金曜日の8：30～17：00、新患受付は8：15～11：00（急患は除く）。手術は火曜日・木曜日の午後に充て、他の曜日の午後は外来小手術と他科入院患者の歯科治療を行っております。

第4回 医療マネジメント学会「九州・山口連合大会」に参加して

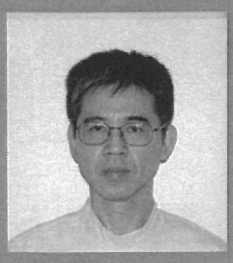
医療マネジメント学会九州・山口連合大会は、九州・山口各県の医療マネジメント学会支部単位で行われている地方会を年1回合同で開催しようと4年前から始まりました。今回は、佐賀大学医学部附属病院長十時忠秀先生の下に、九州大学医学部百年講堂で10月29日、30日の両日開催されました。クリティカルパス、医療安全、診療録管理、地域医療連携、人事、経営等を中心に、現在の医療の抱える課題について、シンポジウム4、教育講演7、一般口演135、クリティカルパス展示107が行われ、約1,000名の参加者がありました。当院からは、基調講演1題、教育講演1題、一般講演13題の発表と、17題のクリティカルパス展示が行われました。医療マネジメント学会は、医師、看護師その他の全職種が参加して、医療の現場における課題を研究し、その成果を発信している医療の質向上を目的とした学会です。今回の九州・山口連合大会も、その成果が十分に得られた学会でした。次回は、別府市（会長：国立病院機構西別府病院長森照明先生）で平成18年11月24日、25日開催予定です。

なお、第8回医療マネジメント学会学術総会は、平成18年6月16日、17日横浜市で開催されます。また、医療マネジメント学会熊本地方会は青磁野リハビリテーション病院理事長金澤知徳先生のお世話で平成18年3月11日に開催される予定です。熊本地方会につきましては、詳細が決まり次第、先生方にご案内を差し上げます。　（統括診療部長　野村　一俊）

大会開催風景

平成17年度 第1回　開放型病院連絡会症例紹介

当センターにおけるStanford A型急性大動脈解離症例の現状と問題点



心臓血管センター心臓血管外科
森山 周二・毛井 純一

大動脈解離は範囲により急性期の治療方針が異なるため、その分類にStanford分類（A型、B型）がしばしば用いられます（図1）。

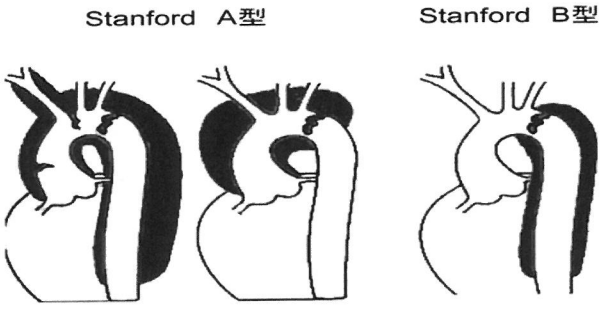


図1．大動脈解離の分類（Stanford分類）

Stanford A型急性大動脈解離（A型急性解離）は自然予後が不良なため、早期の的確な診断・治療（手術）が必要です。しかし解離腔が早期血栓化した症例では内科的治療例が外科手術例と比較して良好ですが、急性期以後の再解離、血流再疎通、破裂をきたす症例もあり、急性期の治療方針には未だ統一した見解が得られていないのが現状です。当科でのA型急性解離の急性期治療方針は、解離腔開存型では手術、解離腔血栓閉塞型では降圧療法を主体とした内科的治療を選択しています。

過去約1年間（2004年4月から2005年6月）に当センターで経験した急性大動脈解離は56例で、A型急性解離は39例でした。A型急性解離のうち解離腔開存型は22例、解離腔血栓閉塞型は17例で、年齢・性別・併存疾患に有意差を認めず、大動脈弁逆流・心嚢液貯留・急性心筋梗塞などの解離関連合併症にも有意差を認めませんでした（表1）。また来院時または来院直後の心肺停止（CPA）を9例認め、全例解離腔開存型（A型急性解離の23.1%）で、その80%は発症から来院まで2時間以内（平均1.3±1.3時間）でした。CPA症例以外の解離腔開存型13例は緊急手術（上行置換術8例、全弓部置換術5例）を施行し、全例救命できています。

解離腔血栓閉塞型17例中、2例に緊急手術（全弓部置換術）を施行し、急性期降圧療法を行った15例中3例で慢性期に手術を施行し救命できています。内科的治療中、急性期に下行大動脈破裂、再解離による広範囲脳梗塞で2例を失い、慢性期に他病死で1例失いました（図2）。死亡例を除く内科的治療施行9例中6例（66.6%）で解離腔の縮小を認めています（図3）。A型大動脈解離の急性期死亡例は発症直後のCPA9例と保存的治療を行った解離腔血栓閉塞型の2例のみでした。急性期手術成績は向上していますが、発症直後の地域救急医療の対応や病院到着後の解離腔血栓閉塞型の治療戦略は今後の課題といえます。

表1.　Stanford A型急性大動脈解離症例の患者背景

	解離腔開存型（n = 22）	解離腔血栓閉塞型（n = 17）	p value
性別（男／女）	9／13	7／10	ns
年齢	40-89	40-90	ns
（平均±標準偏差）	（71.5±14.4）	（72.4±14.5）	
併存疾患（%）			
高血圧	21（95.5%）	14（82.4%）	ns
心疾患	1（4.5%）	3（17.6%）	ns
解離関連合併症（%）			
大動脈弁逆流	4（18.2%）	3（17.6%）	ns
心嚢液貯留	15（68.2%）	7（41.2%）	ns
急性心筋梗塞	1（4.5%）	1（5.9%）	ns
ショックまたはCPA	10（45.5%）	2（11.8%）	0.03
来院時CPA	9	0	0.003
外科治療	13	5	0.03
（緊急手術 ／ 待機手術）	（13／0）	（2／3）	
死亡例（%）	9（40.9%）a	3（17.6%）	ns
手術死亡	0／13	0／5	ns

CPA; cardiopulmonary arrest, ns; not significant.　a,全例CPA症例。

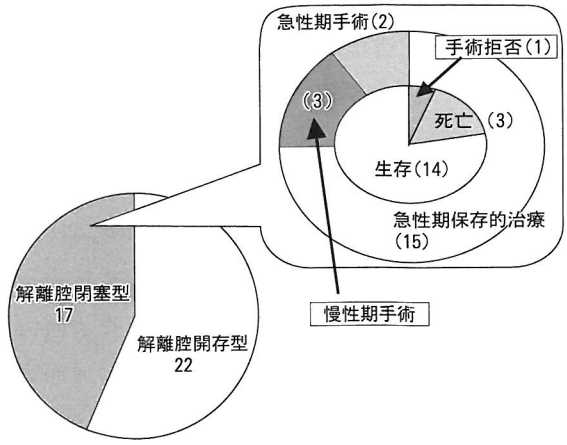


図2．A型急性大動脈解離（解離腔血栓閉塞）の治療成績

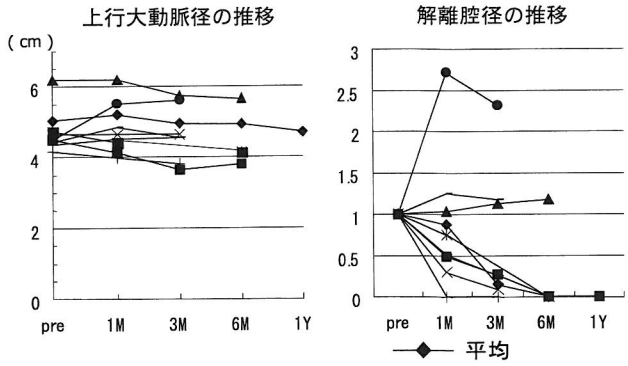


図3．A型急性大動脈解離（解離腔血栓閉塞）保存的治療例の上行大動脈径・解離腔径推移

医学シリーズ　No. 131　血液・膠原病内科（No. 3）

最近のトピックス

HTLV-1感染者の為の最新プロジェクト

総合医療センター
血液・膠原病内科
武本　重毅

全国120万人と推定されるHTLV-1キャリアの１千人に１人が感染から平均50年後に成人T細胞白血病（ATL）を発症します（そのほとんどが母児感染です）。ATL患者の約７割が九州出身です。高悪性度悪性リンパ腫に分類されており、化学療法による平均生存期間は１年と短いため、国立病院機構熊本医療センターでは現在最も有効な治療法である造血幹細胞移植を行っています。

1999年から献血者に対するHTLV-1感染（抗体陽性）の告知が始まり、その結果ATLを発症するかどうかの不安を抱く人が増えています。ATL発症を予知・予防するために我々が注目している分子を図１に示します。この中で血清中の可溶性IL-2受容体（sIL-2R）値をATL患者と他の悪性リンパ腫患者で比較すると、悪性度の高い急性型ATLやリンパ腫型ATLではより高い値を示しました（図２）。発症初期では数千U／mlということもありますが、典型的なATL症例では1万U／mlを超えて10万U／ml以上ということも珍しくありません。さらに発症時や再発時の可溶性CD30（sCD30）も有意に上昇していました（図３）。

国立病院機構熊本医療センターでは、これらの分子を測定することによる「ATL発症高危険群の同定―ATLの発症予防を目指して Joint Study on Predisposing Factors of ATL Development（JSPFAD）」、「成人T細胞白血病リンパ腫（ATL）における微小残存病変（MRD）検査法の臨床応用についての第２次研究」、さらに我々独自に「可溶性CD30（sCD30）を用いた成人T細胞白血病（ATL）発症および治療抵抗性獲得の予知」というプロジェクトを開始しました。これらの結果が発症予知や早期予防につながり、HTLV-1感染者のために有用な情報を提供できるようになることが期待できます。

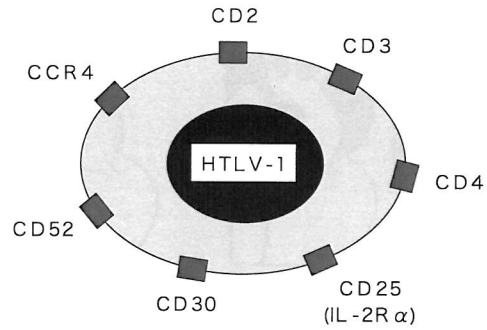


図１：ＡＴＬ細胞表面に発現している分子

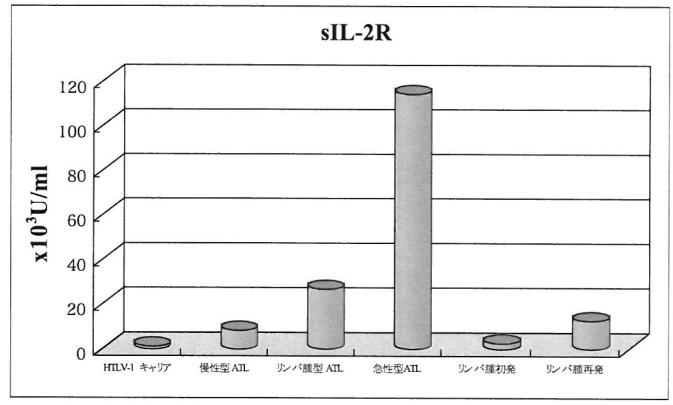


図２：ＡＴＬと他の悪性リンパ腫患者血清中 sIL-2R

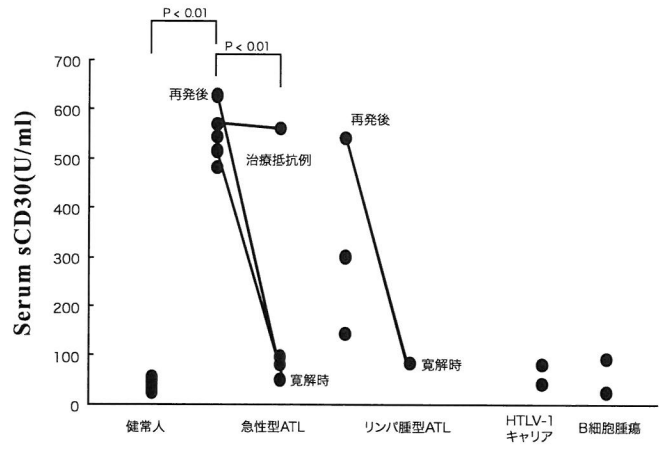
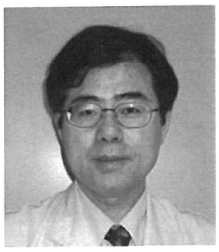


図３：血清可溶性ＣＤ30値

国際医療協力

－ 集団研修コース“肝炎の疫学とその予防、治療対策セミナー” －



消化器病センター
消化器科医長
超音波診断室長
杉　和　洋

本院では昭和63年よりJICAの依頼を受けて集団研修コース、血液由来感染症“AIDS、ATL、ウイルス肝炎”を実施して参りました。平成15年より名称を新たに“肝炎の疫学とその予防、治療対策セミナー”と名称を変更して再スタートして今日に至ります。

第3回セミナーは平成17年8月29日より9月16日にかけて開催され、エジプト、パキスタン、コートジボアール、フィリピン、ミャンマー、ケニア、ナミビア、フィジーより、計8カ国9名の研修員が参加しました。

初日は熊本県ならびに熊本市への表敬訪問が行われ、2日目は各国のカントリーレポートから開始し、各国の肝炎の実態と対策が報告されました。引き続き広島大学教授吉澤浩司氏、東芝病院研究部長三代俊治氏の講義が行われました。本邦のウイルス肝炎研究の最先端を行く両講師の充実した講義は本セミナーのオープニングに相応しいものでした。3日目は国立感染症研究所岡部信彦氏、北九州赤十字血液センター清川博之氏、久留米大学井出達也氏の講義が行われました。世界的にみた肝炎ウイルスのコントロールプログラム、安全な血液の確保、針刺し事故の現状とその対策についての講義で、まさに肝炎の疫学と予防に関する内容でした。4日目は財団法人国際保健医療交流センター蟻田功理事長により、生物の誕生から人類の進化を経て文明が発達する過程で感染症が蔓延するに至った歴史的背景が講義されました。壮大なスケールの内容で研修員が感動しているのが判りました。次いで財団法人化学及血清療法研究所時吉幸男氏、同野崎周英氏のウイルス学とワクチン学の講義があり、杉による肝硬変と肝がんの臨床の講義で締めくくりました。

第1週最終日には今回新たに取り入れた熊本大学附属病院での講義と治療見学が行われました。消化器内科教授佐々木裕氏と小児外科教授猪股裕紀洋氏による講義と内視鏡治療見学があり、大変好評でした。

第2週には、国立病院機構長崎医療センター、国立国際医療センター、東京都日赤血液センターNATセンターで講義と実習を受けました。

第3週には久留米大学医学部で研修を受けた後に再び熊本に帰り、2日間にわたりB型肝炎ミニシンポジウムが開かれました。広島大学高橋祥一氏によるB型肝炎の臨床、国際医療福祉大学熱海病院教授藤澤知雄氏によるB型肝炎の母子感染の実態とその予防、名古屋市立大学教授溝上雅史氏によるB型肝炎のゲノタイプとその臨床的意義について講義を受けた後に、ワークショップに移りました。研修員を2グループに分け、それぞれのグループで各国におけるB型肝炎の共通する問題点を3点挙げてその解決策を考えるというものです。これまでの受動型の研修から能動型への試みでしたが、研修員はお互い知恵を出し合い建設的な方策を導き出しました。

9月16日にはファイナルレポート発表と評価会を行い、閉講式、フェアウェルパーティーで幕を閉じました。研修員からは、本コースは大変有益で帰国後これを参考に母国の肝炎対策に役立てたいとの意見がありました。コースリーダーを務めて今回で3回目となりますが、研修員の協力と関係者の皆様のご指導により、より良い研修にしていきたいと考えています。最後に、関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。

セミナー開講式

新任職員紹介

外　科
大堂雅晴（おおどう まさはる）

このたび九州最西端の長崎県佐世保市にある佐世保共済病院より国立病院機構熊本医療センターへ赴任しました大堂雅晴といいます。

熊本市内坪井町で幼・少年時代を過ごし、久留米大学へ進学。卒業後は、久留米大学外科学講座へ進みました。

肝臓、胆嚢、膵臓外科を研鑽し、臨床、研究の中心は肝細胞癌(HCC)、十二指腸乳頭部癌でしたが、筑後地方周辺はC型肝炎人口が多く症例のほとんどがHCCであり肝切除、マイクロウェーブ凝固壊死療法、ラジオ波焼灼療法の治療に携わっていました。またこの領域の診療においては超音波診断が不可欠であったことから術中超音波診断、門脈内超音波診断も学んで来ました。

このたび24年ぶりの帰郷に伴いこの国立病院機構熊本医療センターに勤務させて頂くこととなりました。生まれ育ったこの地での地域医療に外科のメンバーとして微力ながら貢献できればと思っております。

よろしくお願い致します。

研修レポート

外　科
田中響（たなか ひびき）

いつもお世話になっております。平成17年4月より国立病院機構熊本医療センターにて研修させていただいている田中響と申します。

最初の半年で血液内科、循環器科、腎臓内科をまわり、現在外科にて研修中です。2ヶ月毎に診療科が変わり、その度に全く新しい環境になることを一時は負担と感じることもありましたが、これから医師を生業としていくにあたり非常に貴重な経験を多々できていると感じています。その一つとして、指導医の先生を始めとして多くのスタッフ方と知り合うことができることが挙げられます。性格が異なることはもちろん、治療方針、患者様との接し方などそれぞれの先生方に十人十色の特徴があります。それらを身近で見て感じることで、自分の目指す医師像を少しずつ確立することができているように思います。ただ、どの先生方にも共通するものがあり、それはどんなに疲れていてもおさまることのない仕事に対する情熱であり、これにはただただ頭が下がるばかりです。早起きだけで既に疲れている自分をはがゆく思いながら、少しでも諸先生方に近づいていけるよう邁進するつもりです。

今後も技術はもちろん、姿勢、言動、立ち振る舞い等を諸先生方から‘盗み’つつ研修を続けさせていただきたいと思っております。

今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

救命救急センター
澤山浩（さわやま ひろし）

はじめまして。平成17年4月から、国立病院機構熊本医療センターで研修している澤山浩と申します。国立病院機構熊本医療センターの研修医として2年間お世話になります。

半年間で、循環器科、神経内科、消化器科を研修させて頂きました。また、手技として、スワンガンツカテーテル検査、静脈穿刺、心エコー等を勉強させて頂きました。

神経内科においては、神経所見の取り方および脳梗塞急性期の治療法に関して学びました。また、患者様に真摯に接し、信頼関係を築くことの重要性に関して問題提示して頂き、より良い医療を行うために何が必要であったかを考え直すことができました。

消化器科では、内視鏡検査、腹部超音波検査を中心にその手技に関してご指導頂きました。また、疑問点にはひとつひとつ丁寧に教えて頂きました。他科の先生も質問すると快く御指導頂いております。ひとつの症例をさまざまな分野、観点から学べ、非常に充実した毎日を送っております。先生方に叱咤激励され時に落ち込んでしまうこともありますが、先生方のご指導常に真摯に受け止め反省し向上心を持って励んでいきたいと考えております。

未熟者ではございますが、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻の程宜しくお願い致します。

研修のご案内

第52回　三　木　会（無料）
（糖尿病、高脂血症、高血圧を語る会）
［日本医師会生涯教育講座3単位認定・糖尿病療養指導士認定更新0.5単位認定］

日時▶平成17年12月15日(木)19：00～21：00
場所▶国立病院機構熊本医療センター　教育研修棟4階

1.『糖尿病治療における最近の話題について』
国立病院機構熊本医療センター代謝内科　東　輝一朗、市原ゆかり、児玉　章子、高橋　毅、小堀　祥三
2.『糖尿病・透析患者で閉塞性動脈硬化症、狭心症を合併した1症例』
国立病院機構熊本医療センター循環器科
新造　竜也、大庭　圭介、梶原　一郎、村上　和憲、宮尾　雄治、藤本　和輝
3.『持続性重症低血糖をくり返す重症インスリノーマの1例』
熊本市医師会熊本地域医療センター代謝内科　笹原　誉之
4.『糖尿病管理連携クリティカルパスの目指すもの』
国立病院機構熊本医療センター代謝内科　小堀　祥三、市原ゆかり、児玉　章子、高橋　毅、東　輝一朗

なお、興味のある症例、疑問・質問のある症例がございましたら、ご持参いただきますようお願い致します。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター内科医長　小堀　祥三・東　輝一朗 TEL 096-353-6501(代表) 内線796

第83回　月　曜　会（無料）
（内科症例検討会）
［日本医師会生涯教育講座3単位認定］

日時▶平成17年12月19日(月)19：00～20：30
場所▶国立病院機構熊本医療センター　地域医療研修センター

1. 呼吸器内科による胸部X線写真供覧
国立病院機構熊本医療センター呼吸器センター呼吸器内科医長　森松　嘉孝
2. 持ち込み症例の検討
3. 症例提示「赤芽球労を来したＳＬＥの1例」
国立病院機構熊本医療センター総合医療センター血液・膠原病科　今西　彩
4. ミニレクチャー「透析シャントトラブルに対するインターベンション治療」
国立病院機構熊本医療センター総合医療センター腎センター　宮中　敬

日頃、疑問の症例、興味のある症例、X線、心電図、その他がございましたら、ご持参いただきますようお願い致します。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター副院長　河野　文夫　TEL 096-353-6501（代表）FAX 096-325-2519

第44回　シンポジウム（無料）
［日本医師会生涯教育講座5単位認定］

日時▶平成18年1月21日(土)15：00～18：00
場所▶国立病院機構熊本医療センター　地域医療研修センター

「医療の将来」－生活習慣病としての糖尿病対策－　座長：熊本県医師会理事　田代　祐基
1. 臨床の現場（病院）から　国立病院機構熊本医療センター内科部長　東　輝一朗
2. 臨床の現場（診療所）から　もりの木クリニック理事長　矢野まゆみ
3. 研究者の立場から　熊本大学大学院医学薬学研究部代謝内科学教授　荒木　栄一
4. 行政の立場から　厚生労働省　予　定

なお、興味のある症例、疑問・質問のある症例がございましたら、ご持参いただきますようお願い致します。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター地域医療センター事務局 TEL 096-353-6501(代表)内線263　096-353-3515(直通)

■原稿を募集致します■

登録医の先生の投稿を歓迎致します。400～800字程度を基準にお願い致します。
送付先　〒860-0008 熊本市二の丸1-5
国立病院機構熊本医療センター　『くまびょうNEWS』編集室まで

平成17年 研修日程表 12月

国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター

12月	研修ホール	会議室	その他
1日(木)			7：50 整形外科症例検討会 C 17～19 循環器カンファレンス C
2日(金)			8：00 消化器病研究会 C 8：00 麻酔科症例検討会 手 8：00 皮膚科症例検討会 臨 17～18 救急部カンファレンス C
5日(月)			8～00 MGH症例検討会 C 16～18 泌尿器科病棟カンファレンス 別6 17～18 小児科カンファレンス 外来
6日(火)		18：00～19：30 血液病懇話会（図）	8～00 救急部カンファレンス C 15～18 外科術前術後症例検討会 C
7日(水)		16：00～18：00 皮膚科組織検討会（図）	17：00 消化器疾患カンファレンス C
8日(木)			7：50 整形外科症例検討会 C 17～19 循環器カンファレンス C
9日(金)			8：00 消化器病研究会 C 8：00 麻酔科症例検討会 手 8：00 皮膚科症例検討会 臨 17～18 救急部カンファレンス C
12日(月)			8：00 MGH症例検討会 C 16～18 泌尿器科病棟カンファレンス 別6 17～18 小児科カンファレンス 外来
13日(火)		18：00～19：30 血液病懇話会（図）	8：00 救急部カンファレンス C 15～18 外科術前術後症例検討会 C 19～21 泌・放射線科合同ウログラム C
14日(水)		16：00～18：00 皮膚科組織検討会（図）	17：00 消化器疾患カンファレンス C
15日(木)			7：50 整形外科症例検討会 C 17～19 循環器カンファレンス C **19：00～21：00 第52回 三木会 研4F** **（糖尿病、高脂血症、高血圧を語る会）** **［日本医師会生涯教育講座3単位認定・糖尿病療養指導士認定更新0.5単位認定］**
16日(金)			8：00 消化器病研究会 C 8：00 麻酔科症例検討会 手 8：00 皮膚科症例検討会 臨 17～18 救急部カンファレンス C
17日(土)	13：30～16：30 第100回 看護卒後研修〈会費制〉 （※9月3日変更分） 「転倒転落防止」 杏林大学保健学部保健学科教授 川村 治子		
19日(月)	**19：00～20：30 第83回 月曜会(内科症例検討会)** **［日本医師会生涯教育講座3単位認定］**		8：00 MGH症例検討会 C 16～18 泌尿器科病棟カンファレンス 別6 17～18 小児科カンファレンス 外来
20日(火)		18：00～19：30 血液病懇話会（図）	8：00 救急部カンファレンス C 15～18 外科術前術後症例検討会 C
21日(水)		16：00～18：00 皮膚科組織検討会（図）	17：00 消化器疾患カンファレンス C
22日(木)			7～50 整形外科症例検討会 C 17～19 循環器カンファレンス C
26日(月)			8：00 MGH症例検討会 C 16～18 泌尿器科病棟カンファレンス 別6 17～18 小児科カンファレンス 外来
27日(火)		18：00～19：30 血液病懇話会（図） 19：00～21：00 小児科火曜会	8：00 救急部カンファレンス C 15～18 外科術前術後症例検討会 C
28日(水)		16：00～18：00 皮膚科組織検討会（図）	17：00 消化器疾患カンファレンス C

（図）図書室　C 病院本館2階カンファレンス　手 手術室控室　臨 臨床研究部会議室　別6 別6病棟　外来 小児科外来　研4F 研修棟4階

問い合わせ先　〒860-0008 熊本市二の丸1番5号　国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター
TEL 096-353-6501（代）内線263　096-353-3515（直通）